



一松学舎松琴会 岩手県支那便り

発行日 二〇一二年 四月一八日

編集者 宮本 義著 第一〇八号

## 川村敏明兄を送る

一思ひ出すこと幾つか

川村敏明兄が亡くなつた一事、四月十八日付新聞「おくや

み」欄で知った。

「一瞬、「あー、やつぱり」と思った。

以前、ご本人から、「胸の、ここに入っている。ベースメーカーは、普通の物とは違つて、心臓に異変があれば、直ぐ知らせる特殊なもの」と伺つたことがあった。

話は、宴席で、酒の肴みたいなお喋りの中、しかも十年以上も昔のことなので正確さは欠けるが、内容は大旨、次のようなものだった。

川村兄が未だ在職中、盛岡で中学合同の体育大会があった。

その時、兄も校長として参加していたが、大会進行中、突然、意識を失つて倒されられた。

兄は、好奇心には旺盛、行動も積極的で、病氣があつた人だと感ぜさせない。首も、兄特有のありつけさきさせた語り口に引き込まれ、まったく他人事のように聞いていたけれど、その話は、妙に私の頭の中に残つた。

後日、奥様の七重さんから兄が亡くなられた時の様子を、お手紙で知らせていただきたいが、死因はやはり心臓だった。

「主人は今年に入つてから度々不整脈を起こし、入退院を繰り返しておつまました。

四月十四日には不整脈発生を抑えるカテーテルアブレーションの手術をしていただきましたが、二日後の四月十六日午前四時四十五分、ついに力尽き、永遠の眠りにつきました。

周りにいた先生方は驚いた。そして誰からともなく「これは脳溢血だ」ということになつた。

「そしたら今頃、私は此の世にいがかったネ」と言つた。

「それ、行きかけた彼の世からまた舞い戻つて、皆さんは喜んでお喋りをしているのです」

「シカした先生がいた。確か、吉田校長先生だと伺つたが、結果は、その先生が言つた通りだつた。

「それで、行きかけた彼の世からまた舞い戻つて、皆さんは喜んでお喋りをしているのです」

「兄は、好奇には旺盛、行動も積極的で、病氣があつた人だ

と感ぜさせない。首も、兄特有のありつけさきさせた語り口に引き込まれ、まったく他人事のように聞いていたけれど、

その話は、妙に私の頭の中に残つた。

後日、奥様の七重さんから兄が亡くなられた時の様子を、お手紙で知らせていただきたいが、死因はやはり心臓だった。

「主人は今年に入つてから度々不整脈を起こし、入退院を繰り返しておつまました。

四月十四日には不整脈発生を抑えるカテーテルアブレーションの手術をしていただきましたが、二日後の四月十六日午前四時四十五分、ついに力尽き、永遠の眠りにつきました。

おさらく痛みも苦しいこともなく、穏やかに眠りの中で息を引き取つたものと思われます。

とても綺麗な、幸せそうな笑みを浮かべた死顔でした。  
死因は急性心不全でござります」

私と川村兄とは、二松學舎の先輩、後輩の関係だが、私が現役の時は兄も中学校の校長で、中・高連絡会では、一緒にすることがあった。

元々この会は生徒の生活指導について情報を交換する必要があるから設けられたものだが、下手な情報提供は自校の評価や評判にかかるといった意識がけたらしく、なかなか本音が出てこない。

それに對し、兄は一向そんばりとは無顧着で、

「最近、擔帯を持する生徒が多くなってきたが、我が家では、気に入らぬ生徒を中傷して悪口を流すイジメが増えてきた。それに外部とのアクセスから事件になりかけた事例が一件ある」などと事実を表にして話の中に切り込んでゆく。

「実は、我が校でも」と口を開くよといふ。

学校という所は、生徒を守ることが第一で、学校、先生方の面では次の次、兄はそういう姿勢で徹していようだ。

人生百年といわれる今の世、七五歳は少々若じ気がするけれど、与えられた命を精いっぱい生きやり、よく気がする。良いお付きをいただき、本当にありがとうございました。安らかにお休みください。